

といへり。

○油酒屋三郎右衛門蕃邸

堅町池田屋小路の東角にて、池田屋の舊邸と相角なり。國初以來此の地に居住し、諸役を免除せられ、實に堅町草創以來の舊家なりといへども、嘉永五年家屋を醫師伍壹晋齋へ賣却して、此の地を退去せり。

○油酒屋三郎右衛門傳

家記に云ふ。本姓藤原氏にて、當國富樫氏と同族なる林六郎光明の裔孫也。當國石川郡福富村の邑長林六郎右衛門・同郡増泉村林喜左衛門・能美郡三坂村林孫市・河北郡笠嶋新村林源右衛門等皆同姓同族なり。中にも福富村の林は嫡流にて、天正の頃にや二子ありて、長男を六郎右衛門と稱し、福富邊の邑長と成り、福富村に居住す。次男は三郎右衛門と稱し、同郡矢作村へ移住し、矢作村の農民庄右衛門といふものゝ家に寓居す。矢作村は往古より矢を矧ぐもの多く居たるにより、三郎右衛門も其の職業を學び、慶長年中金澤へ出で、堂形邊疊屋橋の近邊に居住し、矢矧の業を職とす。後居地を召上げられ、替地を堅町にて賜はり、諸役免

除ありしかど、後其加の爲め相願ひ上納す。是元和年中の事也。堅町へ移住の後は、燈油と酒造との店を開き、之を營業とす。故に世人油酒屋と呼び、遂に屋號とす。然るに油商賣をとどめ、酒造のみと成りたるに依りて、寶永元年十二月より油酒屋の屋號を改めて、酒屋と稱す。二代三郎右衛門の子太兵衛と云ふもの、延寶八年に片町へ別家し、酒屋太兵衛と稱す。是酒屋宗左衛門の家祖也。正徳元年に太兵衛隱居して、亦別家を建つ。是片町酒屋太四郎家なり。夫れより本家三郎右衛門・別家宗左衛門・太四郎の三家と成り、三家共に商業を勵み、中にも酒宗・酒太と呼びて、宗左衛門・太四郎の兩家は呉服商をなし、福裕にて繁昌せしかど、三郎右衛門は酒造を閉店して家勢追々衰微し、嘉永五年遂に家屋を賣却す。別家宗左衛門・太四郎の兩家も、明治維新廢藩置縣の際呉服店を廢し、各家勢衰微して、片町の家屋を賣却し退去せしが、今は其の子孫甚だ零落すと云へり。

○新堅町

此の町は堅町の上にて、堅町より後に町地と成りたる故

に、新堅町と呼べり。此の地もいにしへは河原なりしを、堅河原町とひとしく、河原を埋めて町地となし、後地子町とは成りたるなるべし。元祿九年の地子町肝煎裁許附に、新堅町の傍註に、九里より上、九里より下と裁許を分てり。改作所舊記に載せたる寛文十二年の書札に、新立町と載せたり。此の時代より既に新堅町の町名を建て居たること知られたり。

○新堅町徳榮寺

東方眞宗道場なり。世人土藏御坊と呼べり。寺記に云ふ。開基最靜は加賀國河北郡大衆免般若院の住僧なり。寛正元年六月本願寺に至り、蓮如上人の弟子と成り、名を榮空と改め、同年七月般若院を徳仁寺と改號す。然るに天正年中の兵亂の爲め破却せられ、寛永元年に近衛家の二男覺順當地に下向ありて、彼の廢寺を再興し、本山より更に寺號を申請け、徳榮寺と號す。とあり。舊傳に云ふ。寛永年中に當寺再興の時、淺野川味噌藏町なる味噌藏を廢止せられけるにより、右藏の古材木を買入れ、之を以て本堂を建てたり。故に世人土藏御坊と稱すといひ傳へたり。従前は舊記

にも其の事を記載ありしかど、火災に燒失して、今は舊記等もなく、傳言のみなりとぞ。按するに、變異記に、延享三年六月十三日新堅町出火、徳榮寺等類燒す。とあり。されば此の時などに記録等も燒亡しけるにや。味噌藏廢止の事は、諸記録にいまだ見當らず。

○新堅町廣見

舊傳に云ふ。往昔は今云ふ枝町は穢多共の居住所にて、廣見と稱する地は其の頃三味の茶毗所なりしが、此の地邊追々町地と成り、穢多共は轉地を命ぜられ、跡地は穢多町と稱して地子町と成りしを、後穢多の名を忌みて枝町とせり。三味の燒場跡は明地となし、今に至り廣見と呼びて、家屋を建てざりしといへり。平次按するに、法船寺町の廣見も、三味の燒場跡也といひ傳へたり。

○才監物蕃邸

明暦二年閏四月瑞光寺來歷書に云ふ。當寺屋敷新立町才監物上ノ地之内廿間四方、門前之道相添、四百三拾三步拜領仕度趣、寛永九年壬申春本多安房守殿頼申處、其時分諸專津田勘兵衛殿に被仰付由に付、安房守殿家老淺田六右衛門